

# ジュネーブから日本へ、インター ナショナルとナショナル

—— 新渡戸稲造の悲劇性 ——

照 井 悦 幸

## 序

満州事変前後の激動する国際社会の時期に表明された新渡戸稲造の行動や言動は、その国際人という名において多くの人々の批評を受けた。これは、研究者の間では周知の事実であった。しかし、たとえば「生粋の帝国主義者だ」といった国際人新渡戸というフレーズに対してまったく正反対の評価が存在する事実の確認は、今日五千円札の顔としての新渡戸の一般的な認識の定着にしたがい、そのあまりに一般的となった認識がため、驚きを越えてむしろ人々に、固定された新渡戸像をもった己の認識の仕方に奇妙な信じ難さを与えるのである。新渡戸は、大正デモクラシーを代表するリベラリストであったにもかかわらず、戦後長らくその名声が消え失せていた。三輪公忠教授は「新渡戸稲造の『復権』」と題した論稿の中で、以下の様に述べる。

「—— アメリカにとって、新渡戸は戦前日本の拡張主義的思潮を代表する一人であったばかりでなく、なによりもまず、『インターナショナリスト』としての責任を、軍閥の『圧力』のもとで、恥じらうようすもなく放棄してしまった『変節漢』であった。つまり、占領軍と占領協力者の支配する戦後日本の文化のもとでは、新渡戸の復活は難しいことであった。」<sup>1)</sup>

アメリカといえば、「太平洋のかけ橋」となると新渡戸が望んだその片岸であり、彼はそこに学び、そこで妻に出会い、その理解にもっとも力を注いでいた人であった。アメリカは新渡戸にまず最初に、かつ親密に結びつけられるとこ

ろである。その一般的な認識が定着すればいっそう人々は、そのアメリカによって新渡戸が長らく黙殺され続けていたということに驚きを隠せないはずである。

そして三輪教授は、新渡戸研究における朝鮮併合に関する事実の改ざんについて触れ「—— 彼ら(研究者)は新渡戸から、近代日本の汚点ではなく、ヒューマニスト、クリスチャン、反軍国主義の国際主義者のイメージだけを抽出しておきたかったのであろう。」<sup>2)</sup>と指摘する。そして、今、確立するかのようである国際主義者新渡戸の「神話化」の路線からの脱出の試みがあることに、救いを感じていると結んでいる。

さて、新渡戸が五千円さつの肖像に登場して今年で七年目である。「シントト」と読まれたほど知られずにいた新渡戸の存在の偶像化をもっとも危ぶむ点は、日本が軍国主義に突き進んでいった時代を通じて、新渡戸にナショナリスト的な側面が明らかに見えるのだとする点に集中する。それはインターナショナリストとしての新渡戸が強調されればされるほど無視できない新渡戸の側面となる。本稿は、この晩年の理解が新渡戸稲造の正しい把握と歴史的な位置づけのために非常に大きな問題であることを承知のうえで、新渡戸の生きた時代を全体的に眺め、インターナショナリストとナショナリストをテーマして新渡戸稲造の考察を試みるものである。

## 1. 経緯：ジュネーブから日本へ

1920年に国際連盟事務次長に就任した新渡戸は1927年、前年度にその職を辞任して日本に帰国した。66歳のときである。この7年間は、インターナショナリスト新渡戸の名を確実に浸透

させた時代であった。新渡戸の国際連盟での貢献において、特に国連精神の普及と国際文化協力事業の推進が挙げられる。新渡戸は、事務総長である英国のドラモンド卿によって幾度となく講演に派遣された。また、新渡戸が中心となって尽くした国際知的協力委員会は現在のユネスコの基礎となったものである。しかし、国際連盟の仕事にピリオドが打たれ、日本への帰国と同時に貴族院議員となった新渡戸はまさに、ナショナルな問題に巻き込まれてゆくのである。1927年ころから日本は、満州地域への帝国主義的な進出を活発化することになる。同年4月、日本は軍人であった田中義一による内閣が誕生し、田中が首相兼外相として外交の指揮権を握る。幣原外交による国際協調路線から強硬外交へと向かうのであった。そして第一次の山東出兵が実施される。

1929年7月、新渡戸は、田中内閣の後に誕生した浜口雄幸内閣に大蔵大臣として入閣した井上準之助の後任として、日本における太平洋問題調査会（Institute of Pacific Relations）の理事長に選ばれた。これは、本部をハワイに置き、太平洋に面した諸国に直面する国際的な重要問題を科学的に解明することを目的に関係9か国に支部を置いたものである。新渡戸は1927年、第二回のホノルルにおける太平洋会議において井上理事長の補佐として国際会議に参加した経験を持っていたが、理事長就任後、10月下旬から11月にかけての京都での第三回太平洋会議、その二年後の上海、杭州での第四回会議に、日本の団長として参加することになる。京都では主催国として会議全体の議事をとりしきった。

日本団団長としての二度の会議を通じて、最大の問題は満州問題であった。京都会議開会に先立って新渡戸は、外相幣原喜重郎、外務次官吉田茂からもこの問題に注意するよう情報がもたらされていたという。会議においては、日本代表の一人松岡洋右の中国代表の徐淑希教授を相手にした満州問題についての日本の立場を主張する弁舌に新渡戸は激賞し、会議は成功したという所感を述べて居る。そして、1931年の10月21日から始まった上海、杭州での会議の直前

に満州事変が勃発した。

内川永一朗著『晩年の稲造』によればこの上海、杭州における太平洋会議では、米国代表のグリーンの斡旋による満州事変を正式の話題としないという申し合せがあったものの、10月30日の円卓会議において中国側委員の陳立延が「——日本の態度はいかにも軍国主義的である。たとえば自国を称して大日本というのがときはそれである——」といった日本非難をおこなった<sup>3)</sup>。この発言に対して新渡戸は、日本を侮辱する発言であるとして抗議したという。この後、帰国の直前になって蒋介石より新渡戸らと米国代表のグリーンらに南京に招きたいという招待状があったが、健康状態が思わしくなく新渡戸は11月4日に帰国の途についた。

翌1932年2月4日、愛媛県立農林専門学校付属農業学校の校長国松斗升の依頼で、新渡戸は松山市を訪問する。宿泊先でオフレコを約束した上で新聞記者に語った新渡戸の話の報道に端を発する「松山事件」は、今日では新渡戸の軍国主義に対する偽りのない批判的態度の裏付けともされる一方で、実際にはその顛末は、軍閥の圧力に屈した新渡戸というように取られることになってしまった。「——我が国を滅ぼすのは共産党と軍閥である。そのどちらが怖いかと問われたら、今では軍閥と答えねばならない。」と新渡戸が述べたことは、「新渡戸氏の奇怪な主張」として海南新聞による非難報道となった。以後海南新聞は新渡戸批判のキャンペーンをはり、これに帝国在郷軍人会は反応し、新渡戸糾弾委員会が責任を問いただすことに一致する。血盟団メンバーがおりからに一人一殺のテロを実施してゆくなか、新渡戸は謝罪の席に立つことになったのである<sup>4)</sup>。

日露戦争の日本の勝利を契機に、1905年以降アメリカにおける日本人排斥論は「人種的、文明的脅威」を訴え、1907年に日本人労働者の渡航に制限を与え、1924年にはついに排日移民法を日本人を締め出すことに至った。新渡戸はこの排日法に対し非常に憤慨し、法律が撤退されない限り、断じてアメリカの土は踏まないと決意したのであった。そして7年後にコロンビア

大学からの日本研究所設立にあつての特別講演の依頼をも辞退している。そのときにニコラス総長に宛てた辞退の手紙に、新渡戸は以下のように述べている。

「——私の誇りとする日本民族が、世界で尊敬される座から突如、国際的賤民の身に突き落とされたかのような屈辱感に打ちのめされたのだ——。日米間の真の相互理解と信頼とフェアプレイを私は大切にしたい——。このような感情のしこりが残っているかぎり、私はアメリカに行くべきではない。」<sup>8)</sup>

1932年4月14日、しかしながら新渡戸は上述した決断を翻して、ある方面からの頼みを受けてアメリカに渡米することになる。松山事件より2カ月の後のことである。蝦名賢造教授はこの渡米理由に、同郷の駐米大使出淵勝治からの強い働きかけがあったことを示しているが、いわば謎めいたものが多いとしている。また、日米関係の悪化を憂慮して新渡戸は上海、杭州太平洋会議の後、実弟のアルフレッド・エルキンソンやカッスル駐日大使らの支援のもと、カリフォルニアに日本人教授を送って真意を伝えるための講演会を行う方策を考えていたのだという。当初松本重治を予定していたのだが、構想を持ちかけていたカリフォルニア大学からの招待状が来ないまま、新渡戸自らがこのとき渡米を決意したのだともいう<sup>9)</sup>。亡命説もあった。妻メリーの持病の療養のためと推測もされた。ともかく、新渡戸は「甚だ見通しのつかざる真暗な方面に進む気分、暗夜に飛込む如き心地」<sup>10)</sup>と云って、反日感情の緩和のために渡米してゆくのである。このとき新渡戸は71歳である。

妻メリーと共に渡米した後の新渡戸は、フーバー大統領やスチュムソン國務長官との会談を始めCBSラジオでの演説、カリフォルニア大学バークレー校では20回にわたる連続講義を行う<sup>11)</sup>。バークレーでの講義は「Lectures on Japan」として収録されているが、日本の人種、宗教、生活全般にわたる内容であった。いわゆる日本人論の講義をしている。新渡戸によればこの理由を満州事件、上海事件のアメリカ人の

誤解を解くために、日本の文化や風俗習慣を説明して、日本人というものに対する了解と同情を促すに努めるためだということである<sup>8)</sup>。

しかしながら、突然の渡米に対して、松山事件のこともあって、新渡戸の意に反することが多い結果となった。それは新渡戸夫妻と同じ教派のクエーカー教徒からも同様なことである。佐々木篁著『アメリカの新渡戸稲造』のなかには、5月25日付けの「ザ・ニューパブリック」誌に掲載された新渡戸への公開質問状と、6月1日付け「ザ・クリシチャン、センチュリー」に載った新渡戸批判の記事を紹介している。以下はその一部の引用である。

「——私たちは悲しみます。ニトベ博士。あなたは、国際協調の理念を信ずるもの取るべきただひとつの立場にたっているようには見えないのです。——あなたが、沈黙を守るといふのなら理解もできますが、日本の軍国主義を無批判に擁護するというやり方はまったく理解できません。——ニューヨーク市レイモンド・ブエル（ザ・ニュー・リパブリック、1932.5.25）」<sup>9)</sup>

松山事件に続くアメリカでのこのような新渡戸批判の事実に対して、蝦名教授は以下のよう

に述べている。

「アメリカにあつては、新渡戸は従来の主義主張を要節し、日本軍部の手先となったといわんばかりに輕蔑され、祖国日本にあつてはその軍部や在郷軍人会、右翼から国賊扱いをされ、生命の危険にさらされ、新渡戸はこの世に枕するところがなかったといへば、果たしていいすぎであらうか。」<sup>10)</sup>

1933年3月25日、新渡戸はメリー夫人を残して単身で帰国した。夫人は新渡戸の講演旅行に同行中の12月中旬、心臓発作を起こしロスアンジェルス郊外パサデナで養生することにしたのである。新渡戸の帰国から2日目の3月27日、日本は国際連盟からの脱退を表明した。これに対する新渡戸の心情は、以下の4月12、13日に英文毎日に掲載された東京汎太平洋クラブの昼食会での新渡戸の演説の一部に表れる。

「——今やわが国は連盟を脱退した。この際、私に言わせてもらいたい、私は首尾一貫しない自己矛盾を浸している人間の一人である。なぜなら、私は現時点で日本が連盟を脱退するのは正しいと信じつつも、他方でなお、連盟こそ世界将来の福祉に対する最大の希望だ一と信じているからである。——」<sup>11)</sup>

こののち新渡戸は、カナダのバンフで開かれる第五回の太平洋会議の準備に急ぐことになる。8月2日新渡戸はカナダ、バンフへ向かう。そして旅中激しい腹痛に襲われながらもバンフに到着し会議に出席したのであった。8月14日、日本代表団の団長としての演説を行った。新渡戸の最後の演説となったその一部は、以下のように述べられている<sup>12)</sup>。

「——かかる（バンフの）理想環境にあって、初めて、我々は個人的偏向を離れ、国家的相違を滅却し、哲学者超脱をもって、真情を以て新たな探究に専念しうるのではあるまいか。

余がここに、当協会及び我が国、また太平洋諸国、更に全世界に直面する若干の顕著なる議論をあえて取り上げんとするのも、実にこの無私客観的精神一むろんこれがまた本協会の精神でもあるが一からに外ならない。

——我々が近代科学を応用して国家相互の距離を短縮し、交通能力を増加せしむることを学んだ現代において、貿易の部門にも人間に対すると同様、貨物や資本の自由移行を阻止する障害の増加かせしつづめる事実、我々知性への驚くべき挑戦ではないか。——

——ある国にあっては、人工に釣り合わぬ程度の物質の典型を付与されている。又ある国では事情がまったく逆である。以下にしてこれらの明らかな不均等を、共栄共存の原則に従って是正するかが聡明なる政治家の至高の試胆である。——

——なるほど日本は、確かに国際連盟に脱退の意向を通告した。余はここで、ここで裁断の可否を論じたくはない。余個人としては、これは最も興味ある問題であるが、ここでは唯、この事件に対して賜った詔勅に対して諸氏の注意を喚起したい。すなわち、世界と協力せんとする日本の国是は、この事件に至って毫末も影響されるところはないのである。日本の連盟脱退は、諸国家の家族より脱退を意味せぬ。日本は今もって世界の分ち難き一環であることを誇りと考え

る。——

——世界中より参じた国民の親密なる接触によって、やがて感情ではなく理性が、利己ではなく正義が、人類並に国家の裁定者たるの日が来るであろうことを、余がここに期待するは余り多きを望むものであろうか。」

8月28日に会議は終わった。そしてさらにアメリカ東部での講義にゆく予定でヴィクトリアで静養中9月13日に、新渡戸は激しい腹痛に襲われジュビリー病院に入院。そして10月15日に永眠している。

## 2. インターナショナルとナショナル

国際連盟の事務局次長としてあった新渡戸が担ったものに比べ、太平洋調査会の理事長および日本団長としての任務は、外見上その規模も内容も違うものである。しかし、この調査会で活動を始めたことは、新渡戸にとって大きな結末を与えることになってしまったのではなからうか。国際連盟という場を得て、インターナショナルリスト、平和主義者としての新渡戸自身であったものを、一個人の力を越え押し寄せてくるナショナリズム、そして戦争に向かってゆく時代の逆流に真正面からその渦中にとびこんでゆくに似た立場に、新渡戸が立たされていくのはこの調査会以後である。たとえば「悲劇的な様相」と晩年の新渡戸の立場が表現されるに至ることになったその発端がここにあるように思われる。新渡戸を表現するフレーズとしての“ナショナルな立場とインターナショナルな立場の均衡”とは、国際連盟事務局次長と言う立場から太平洋問題調査会の日本の理事長としての立場になったときより試され始めると考えられる。

国際化およびインターナショナルといった言葉が頻繁に使われる今日に、特に新渡戸のナショナルとインターナショナルといったことを問題にするとき指摘しておきたいのは、ナショナルが、インターナショナルに先立つということである。国際主義というなかに、もともと各々

の主権国家の現実的な利害関係を否定するものはない。日本人新渡戸は、自己と国際と日本という関係において、日本の利害を最大に考えるのであって、日本が国際に先立つのは当然なことであった。インターナショナルは、ナショナルに尽くしナショナルは、インターナショナルに尽くすことによって結局はナショナルに尽くす、というのが新渡戸の論理であったといえる。新渡戸は協調精神を主張するものの、現実における祖国優先の感覚は、ひとつの国家のエゴイズムでない限り否定されるものではないと考えている。新渡戸は、太平洋調査会、京都会議の開会のあいさつにおいて、国際心と言うものについて直接ふれたスピーチを以下のようにおこなっている。

That mental attitude which is the sine qua non of success in all undertakings like ours, is the international mind, which, detached from national egotism, views all international question fairly and impartially, objectively and scientifically. An international minds is not the antonym of a national mind. Nor is it a synonym for a cosmopolitan mind, which lacks a national basis, just as philanthropy or charity if it is not to be a kind that increases directly whith the square of the distance -should begin at home. A truly international mind should include patriotism and vice versa. The antithesis of the international mind is neither patriotism nor exophilism but chauvinism and xenophobia.<sup>13)</sup>

私どものようなすべての事業の成功に不可欠な心構えは、利己的な自国中心主義から離れた国際心であります。国際心はすべての国際問題を公平に、偏りなく、客観的にそして科学的にみるのである。国際心は、国家へのこころ（愛国心）の反意語ではない。同様にまた、国際心は国家基盤に欠ける世界主義との同意語でもなく、慈善事業やチャリテータのように、本国から始めるべきであるのだ。真の国際心は愛国心を含むべきものであり、それはまた同時に愛国心が国際心を含むべきものである。国際心の反意語は愛国心でもなく、排外主義であり、外国嫌いだということである。

この考えはまた、新渡戸の著作『Lectures on Japan』のなかに収められている「Development of International Cooperation」にも表現されている。この中でやはり新渡戸は、これからの時代こそ本当の国際心を求める時であるが、まず国際心と世界主義を混同しないように注意を促している。それは世界主義は国家というものを認識しないが、国際心は国家や国籍を無視することはないとする。そして愛国的であってはじめて、国際的になれると述べるのである。国際主義者、本当の国際心を持つものは、自分の国家に対する愛国心を同時に持つものであるという新渡戸の論理は、きわめて現実的な理由で説明される。以下がその理由を述べた部分である。

— In these days when all countries are knit together by many ties, a patriot, if he is to be a genuine one and not a sordid professioal, must needs be an internationalist; for by making his coutry a worthy member of the family of nations, he will serve the highest purpose of his race. Conversely, an internationalist, if he is to be a true one and not of a dreaming, heavenly sort, must have his feet planted firmly on the soil of his country and bring to it treasures from every other land.<sup>14)</sup>

ひとりの愛国者が、自分の国家が世界の中で優れて価値ある国家として認められたいと望むのであれば、さまざまな事柄で密接なかかわりあいなしに行かなくなった今日では、その者は国際主義者であらねばならない。そして反対に、ひとりの国際主義者が単なる空想家でないのならば、まずはしっかりと己の足もとを自国に据えて多くの他の国々から富みや幸福を自国へもたらせなければならない。

そしてこの文章は以下のように結んでいる。

— all the higher interests of nation are in the harmony with the welfare of the whole human race, and that they are served best by cooperation among the nations of the earth.<sup>15)</sup>

ひとつの国家のすべての高価な国益は、全人類の福利の調和のなかにある。そしてそれら国益は、地球上

の国家間の協力によって貢献されるのだ。

新渡戸は、愛国心からなる各々の国益、すなわちナショナルなものを基盤においてのインターナショナルの調和を唱えるのである。その新渡戸の理念は一貫して唱えられていたものであり、『愛国心と国際心は立派に両立し得るのみならず、国際心は愛国心の延長である。愛国心なしに国際心はありえない』というのが、博士のたえず口にし、また在外同胞に注意したところだ<sup>16)</sup>と佐藤全弘教授は述べ、新渡戸の弟子であった田中耕太郎の言葉を以下のように引用している。

「先生は外見より一層民族主義者であり、また外見よりも一層国際主義者であった。先生は外国にいられて決して日本人たる意識を捨てられないばかりではなく、日本の恥辱にならぬようにと云うことを不断に心がけていられ、それを日本の旅行者に要求せられた。——私は先生が国際主義者と民族主義者との調和について理論的に研究せられ、かつその解決を見いだしていられとは思わない。先生は御自身の生活においてそれが調和を体得せられていたのだ。」<sup>17)</sup>

ところで、新渡戸は愛国心ということについてははっきりとした独自の見解がある。愛国者は熱狂的に自国を擁護するだけの外向的愛国者(Extrovert Patriot)と、ひとつの理想から自国の悪や国民の罪をとがめる、内向的愛国者(Introvert Patriot)の二つに区別されることを述べる。内向的な愛国者こそ真の愛国者であり、新渡戸はこれを大言壮語し自国の勝利に熱狂する者とは次元違うことを指摘する。新渡戸は内向的な愛国主義を、理解や和解といったことを強調する母性的な愛を意味させ“Matriotism”「憂国」とよぶ<sup>18)</sup>。そして、この憂国のところがあってはじめて国際心があることを強調している。これは国際主義者といわれる新渡戸が、彼自身非常に愛国精神が強いものであり、それだけナショナリスト、愛国者と言う意味の真のものを明確にさせておく必要があると感じていた概念なのである。

藤永保教授は人間の成長過程においての社会

化が国民的文化の価値規範の学習であるとすれば、人格の形成において好むと好まざるにかかわらず常にナショナリズム的価値の形成へ導くことになる」と指摘している。そして以下に引用する藤永教授のナショナリズムの定義は、新渡戸理解には非常に大切な点であると思われる。

「——ここでいうナショナリズムとは、偏狭な国粋主義や超国家主義を意味するのではない。——ナショナリズムとは、——伝統的日本文化への傾斜の姿勢を指している。あるいは、伝統的な文化のもつ価値規範の内在化といってもよい。」<sup>19)</sup>

武士の子として生まれ武家の教育を受けた新渡戸は、武士としての徴であった帯刀の禁止をうけて、まったく覇気を失いすべての道德観が麻痺したような思いに駆られている。幼少の頃より、父が江戸から持ち帰る文物などで比較的西洋の香りを感じられた環境にいたのであるが、それ以後も極めて日本的な価値観のなか武家である家の名に恥じぬよう、名を上げるよう心にして育ってきたのであった。後に留学などを通じ長く外国で生活することになったとしても、新渡戸の根底に根ざしていたものは、日本的、武士的な精神であったはずである。

新渡戸には、伝統的日本文化に対する強い傾斜があった。彼自身の成長過程に内在化していった価値であり、それが偏狭な国粋主義や超国家主義を意味するものではない「ナショナリストとしての新渡戸」なのであろう。米国人のメリーエルキントンと生活を共にし人種や国籍というものの差異が表面的であることを実感して生きて、なお自ら祖国愛をはっきりと述べるのである。憂国という名を与えてその意味を明確にしようとした新渡戸のこころの奥底に、インターナショナルを知り得てかつ、彼がナショナルをいかに重大に自覚していたかを察するに難くはないであろう。上記の引用に続けて藤永教授はこう主張する。

「新渡戸は、世間並には、国際人の典型と考えられている。——しかし、その外見の下に根強く隠されていた

ものは、このナショナリズムではなかったろうか。——国際主義は、むしろ、新渡戸にあっては、日本をよりよく活かす道として、ナショナリズムから派生した副次的要素ではなかったかと思われるほどである。」<sup>20)</sup>

ここにナショナルのためのインターナショナルという新渡戸の理論は、新渡戸というパーソナリティーとの一致をみせるのである。国際人の典型とみられた外見上の新戸渡の下に隠された強いナショナリズムとは、真の愛国心というものへの理解のなかで相反することではないことが明らかとなる。そしてここにこそ、すなわち国際人といわれる人格の側面を発見するところではないだろうか。

欧米諸国の圧力によっての幕末開国の後、徹底的な欧化政策の推進は日本の西洋の力に対抗し、日本国家としての生き残りをかけた対応なのであった。開国以来の日本の国際化の思想を振り返って喜多村和之教授は、日本の国際に対する思想は、「外部『から』受け入れようとする開かれた方向と、外部に『対して』自己を閉じる姿勢との交替が見られる」と指摘し以下のように述べている。

「明治初年の『文明開化』論や、大正期の国際協調論、あるいは戦後の『平和国家』論は、西洋文明を受容し、西洋中心の国際秩序との同一化を図ろうとする志向性を持った『国際化』論であった。しかし、明治20年代以降に台頭してきたナショナリズムや、その系譜をひく第二次大戦期の『大東亜共栄圏』論は、西洋主導の国際秩序に強く反発し、——独自の東洋的秩序を志向するアジア主義的な国際化論であった。——。」<sup>21)</sup>

このように欧米の圧力から、西洋文明摂取を優先し西洋に追いつくために国際に開かれた日本が、日清、日露戦争の勝利にをひとつの契機に、民族的自尊心を高揚させることになるのは、この時代の日本そのものが、「国益追求、国威発揚」のための国際化、すなわち「ナショナリズムとしての国際化」を行っていたものである。そして、国益を越える「人類益」で考える「グロー

バリズムとしての国際化」とは、今日に至ってもその多くの葛藤を余儀なくされているものである。

亀井俊介教授は、開国の後の欧米からの波に対抗していこうとした人々の精神を以下のように述べている。

「端的に言って、西洋の衝撃は日本人に日本人たることの自覚を与え、その意味を問いかけた。西洋化は彼らにとって、あくまで、日本の政治的、精神的独立を貫くための手段であった。——明治の日本の知的指導者が受けた西洋の衝撃とは、要するに『力』の衝撃——日本を政治的にも物質的にも精神的にも圧倒してしまいそうな近代文明の『力』の衝撃であった。ということである。その衝撃を受けたときの彼らの危機感、およびこれに対処するための態度の確立への焦燥を、私たちはよく理解してかからなければならない。」<sup>22)</sup>

新渡戸は米国人の妻を得、そしてクエーカー教徒として人種や国籍を越えた世界を生きていたのであった。前述した田中耕太郎の言葉にあったように、新渡戸はまさに私生活においては、国際精神と民族精神とを調和させていたのであるにちがいない。それは理論的ではなく生活のなかに実践的になし遂げられていたものであった。ジュネーブを舞台に活躍したインターナショナルリストの、極めて自然に根付いていた自己のアイデンティティとほぼ同一なナショナルへのおもいが母国日本に帰国と同時に直面した焦燥感、時代状況のうねりに向かって悲壮的なものに近い。続けて亀井氏は以下のように述べる。

「『力』よりも『自由』をこそ、あるいは『国家』よりも『個人』をこそ、西洋の本質と見いだすことも、当然あった。——しかし日本および日本人としての自己を守るために、拒否しなければ成らない(と思った)ものも多かった。彼らはその置かれていた状況のゆえに、多方面で早急な取捨選択の態度決定を迫られていた。」<sup>23)</sup>

#### <植民地政策について>

1901年2月新渡戸は、日清戦争によって植民

地としていた台湾の糖業政策の立案のため総督児玉源太郎と民政長官後藤新平により、総督府技師(民政部殖産課)に任命された。9月に台湾植民農業政策の基本となった『糖業改良意見書』を提出以後、事実上約1年半の滞在であったが、台湾糖務局長まで昇格している。我が国で植民問題を講義したのは、札幌農学校においての新渡戸の先輩である佐藤昌介が最初のことであるが、それをうけて担当したのが新渡戸である。1903年に後藤の取り計らいで、京都帝国大学法科大学教授となった後、1908年には東京帝国大学で植民学を担当した<sup>24)</sup>。そして1910年に「植民学会」の創立をあっせんした。新渡戸は我が国における植民地政策学の創始者とみなされるのである。1912年からは、東京帝国大学の法科大学教授として植民地学の講座を担当した。田中眞一教授は以下のように述べている。

「つまり、日清、日露戦争、第一次大戦と十年周期を経つつ、世界屈指の植民地領有国家へ成り上がった日本、その膨張する帝国主義的植民地支配をイデオロギーの側面から補強することの権力的期待を背負った官学アカデミズム植民学、その頂点に位置するところで新渡戸の講義は展開されていたことになる。」<sup>25)</sup>

「日本の帝国主義的植民地支配をイデオロギーの側面から補強することの権力的期待」は、日本国の指導的立場にあった人々のこの植民学講義に対する思惑であったのかもしれない。しかしながら、新渡戸がその思惑に添うことを目的にしてこの講義を展開させたか否かは別の問題である。また植民学がアカデミズムとして帝国主義と結合する必然もないことでもある。現在、新渡戸に始まる講座を国際経済論というかたちで担当する東京大学経済学部の川田侃教授は、新渡戸植民政策論の特徴は原住民利益を優先させた、徹底的な人道主義と現実の実態解明を重んじることにあったとしている<sup>26)</sup>。

一般にいて、植民地の政策といえば、強国の弱小国に対する力による搾取といったことにつながる事となるが、新渡戸の植民に対する思想はこれとは別であったことは明らかなこと

である。農学者であるだけではなくキリスト者である新渡戸には、植民は文明をもたらし人々に幸福を与えるという福音の精神がともなったものであった。

『武士道』を著す五年前、新渡戸33歳のとき出版した『ウィリアム、ペン伝』はアメリカ、ペンシルベニアの植民地建設に尽くしたペンの生涯を述べたものであるが、そこには高い倫理観をもって、公平で寛容な態度で原住民であるインディアンと接した熱烈なクエーカー主義者が描かれるのである。北海道の開拓に携わり、クエーカー信徒である新渡戸がこのペンの生き方、考え方に強く傾倒していたことは容易に知れることである。次に引用するのは、クエーカー教徒の平等主義、普遍主義について新渡戸が述べているものである。

「人種の平等に関しては、フレンド派の人々は、その教理をインディアンと黒人を扱う場合の実際面に活用してきた。アメリカの植民地時代には、ヨーロッパ人たちは、お互い競争して、哀れな原住民を追いつめ、彼らの土地を取り上げた。その当時に、一人の英国人だったウィリアム・ペンは、原住民たちと公正かつ公平な取り引きをし、彼らとの間に、平等な兄弟の立場で条約を結び、そして、彼らの土地に対し適切な代金を支払ったことから、彼等を驚かせた。」<sup>27)</sup>

新渡戸がおこなった米国建国史特別講義を編集して、1919年刊行された『米国建国史要』の解説において斎藤真教授は、「米国建国史要は、——むしろ植民地建設史というべき著述であるが、新渡戸は、アメリカのデモクラシーの源流がすでに植民地時代にあったことを鋭く把握しているが故に、植民地史であることとデモクラシーの歴史であることとは必ずしも矛盾していないのである。」と指摘するのである<sup>28)</sup>。

また、「開拓の困難」と題された新渡戸の文章には、労力と財力が要するにも、誰からも褒められることもない開拓の事業に新渡戸の祖父、父とわたって係ってきたことを幼少の記憶にあることを述べたあと、以下のように述べている。



「ドイツの詩人にリュッケルトという人がある。その詩のなかにひじょうに感服した句がある。すなわち「人類活動の最終の目的は世界の開拓にあり、よしその開拓は人の心の開発であれ、また田畑を切り開くことであれ」という意味の句である。私は彼の言うことは真だろうと思う。

人類活動の目的は世界の開拓にあるに相違ない。しからばこれに当たるものは何人であるか。私は、我々が当たりたいものだ、と答える。」<sup>29)</sup>

満州問題について新渡戸は、京都、上海の太平洋会議を通じても是認する立場をとっている。この背景に、新渡戸のそれまでの満州との係り合いが考慮されねばならない。蝦名賢造教授によれば、新渡戸は満州経営のひとつとして政策された農業開発の事業の指導を、児玉源太郎満州軍総参謀長と後藤新平によって依頼されている。1903年、新渡戸は清国に赴き農業試験場の設置などに関与し、またその指導者として札幌農学校の後輩である横山莊次郎を推挙した。その後、新渡戸は直接には満州経営には係ってはいないが、新渡戸の影響をうけた者たちが、この地域での活動に携わっていったのであった。蝦名教授のは、以下のように述べている。

「——明治より大正期を通じて、満州農業開発のために札幌農学校、北大は文字通りバイオニア的役割を果たしてきたのであり、満州事変以後満州国農政部門においても北大農学部門の果たした役割はきわめて高かったのである。そしてそのことは同時に軍国日本の満州政策に全面的に協力する結果をもたらすことにもなったのである。——その系譜を見ると、札幌農学校、北大—台湾—満州と結ぶ太い線の中に、新渡戸がたっている。」<sup>30)</sup>

新渡戸にとっての植民開拓事業は、北国の寒冷で強いられる貧困生活の改善のため祖父、父の青森三本木の開拓への尽力にさかのぼる。これへの新渡戸家の功績を1867年に明治天皇より讃えられて、14才の新渡戸は農学に志すのであった。植民、開拓にたいする個人的なかかわりあい、そしてその植民、開拓にたいする内側の哲学とは裏腹に、帝国主義、国粋主義の具体的実現としての植民地政策の先頭にいたかた

ちとなってしまっていたのではないだろうか。新渡戸と植民政策との関係は、運命の悪戯のようにも見える。

## 結 語

新渡戸は実践家であった。また、己の人生を強い使命感によって生きた人であった。実践は、理屈通りには行かないものである。実践はある状況がつねにともない、状況はそれを成し遂げるにおいて時に味方し、時によっては妨害になる。だから偉大な実践家は状況の把握に冴える。またしかし、言うまでもなく、その実践が偉大であったためには、実践そのものがひとつの偉大な価値に基づいていなければならない。実践された行為(Doing)に対する評価は、相対的な状況によって変わるが、だからこそ、実践の偉大な価値は、その行為そのものよりまして、行為者が内側に持った価値にかかわってくることになる。すなわち、どのようにあろうとするかという人格(Being)が重要なものとなる。実践がために把握しようとする状況の、その把握の冴えの極致とは、その風向きの判断の冴えよりも、むしろその風向きに幻惑されずに、自分が善としていた在り方をきっちりと押さえていられることになる。

新渡戸は、自分の善の在り方を絶対的なものとの関係において希求した人でもあった。新渡戸は、その著作やスピーチにおいて一貫して国際心や平和主義といったことを述べてきた。新渡戸の理において、その必要性和価値を最大に理解していたに違いない。またキリスト信仰者としての価値であったのも確かなことである。それは、第一次世界大戦の後の国際協調のムードが高まった時期、国際連盟に仕事場を得ていた時に存分に発揮されることになった。そして国際的な舞台より帰国して、早々ナショナルな問題にかかわり、今度は拡張主義的思潮になってゆく日本、アメリカとの開戦に向かおうとする時代に、太平洋調査会において“日本”を代表する仕事場になったところに立って行動していかなければならなかった。新渡戸の状況は、一転するのである。帰国後、新渡戸におきた最初

の大きなできごとが「優渥問題」であったのも象徴的なひとつであったかもしれない。それが天皇とのかかわりあいのなかで国体という極めて日本的な部分の演説であったのも、新渡戸の生い立ちの中から見える別な側面からは驚かされるような発言でもなかったはずであろう。国際主義者としての新渡戸がクローズアップされた国連時代は、相対的によりその実践者でありえたものが、別な時と場所にいたって、日本主義的な新渡戸の側面が際立ってクローズアップされることになったのかもしれない。新渡戸の生涯が66歳で終わっていたならば、国際主義という世間の評価は揺るぎなかったのであろうし、また66歳から始まったのならば、軍国主義の擁護者としてあったのかもしれない。

実践の偉大なる価値は、その行為そのものよりまして、行為者が内側に持った価値にかかわることになるとは、新渡戸の重大な哲学であった。どのようにあろうとするかという人格(Being)が重要なものだとする新渡戸は、表面にあらわれた事実の人々の評価がどうあれ、自分が善としていた在り方をきっちりと押さえていようとしたということは、見透しもないままに暗夜に飛び込む如き心地でも渡米していった新渡戸の行動に裏付けられるものがあるのではないか。新渡戸は、一貫して新渡戸であった。

## 注

- 1) 三輪公忠「新渡戸稲造の復権」ソフィア 33 (3) 1984, 10 p. 399
- 2) 同 上 p. 118
- 3) 内川永一郎『晩年の稲造』岩手日報社, 1983 年, p. 127
- 4) 同 上
- 5) 麻田貞雄「日米関係と移民問題」齊藤 真編『デモクラシーと日米関係』南雲堂, 1973 年, p. 198
- 6) 蝦名賢造『新渡戸稲造』新評論, 1986 年, p. 244 ~245.
- 7) 佐々木篁『アメリカの新渡戸稲造』熊谷印刷出版部 1985 年, p. 153
- 8) 同 上 p. 179~182
- 9) 同 上 p. 180
- 10) 蝦名賢造『新渡戸稲造』新評論, 1986 年
- 11) 内川永一郎『晩年の稲造』岩手日報社, 1983 年 p. 203
- 12) 蝦名賢造『新渡戸稲造』新評論, 1986 年
- 13) 新渡戸稲造「Development of International Cooperation」In Lectures on Japan; 『新渡戸稲造全集第 15 巻』教文館, 1985 年, p. 358, 1985 年
- 14) 新渡戸稲造「Lectures On Japan」『新渡戸稲造全集第 15 巻』教文館, 1985 年, p. 320
- 15) 同 上 p. 321
- 16) 佐藤全弘『新渡戸稲造一生と思想』キリスト教図書出版社, 1980 年
- 17) 同 上 p. 128.
- 18) 同 上 p. 219.
- 19) 藤永 保, 東京女子大学「新渡戸稲造における人格形成」『新渡戸稲造研究』新渡戸研究会 1969 年, p. 79
- 20) 同 上 p. 80
- 21) 喜多村和之「国際化思想の展開」門脇厚司編『日本人の国際化』日経, 1990 年, p. 43~44
- 22) 亀井俊一『講座比較文学第 5 巻・西洋の衝撃と日本』東京大学出版, 1974 年, p. 364
- 23) 同 上 p. 365
- 24) 蝦名賢造「日本の近代と札幌農学校 (3) —新渡戸稲造と太平洋問題を主題」獨協大学経済学研究, 第 44 号, 1986 年
- 25) 田中眞一「植民政策と新渡戸」札幌市教育委員会編『新渡戸稲造』北海道新聞社, 1985 年, p. 281
- 26) 川田 侃「植民政策論の先駆者としての博士」『新渡戸稲造全集第 4 巻』, 月報 8 号, 教文館, 1969 年, 11 月
- 27) 松下菊人「国際人, 新渡戸稲造の特質」職業訓練大学紀要, 第 15 号, B, 1985
- 28) 齊藤 真「解説 米国建国史要」新渡戸稲造『新渡戸稲造全集第 3 巻』教文館, 1983 年, p. 674
- 29) 新渡戸稲造「開拓の困難」『人生雑感』講談社, 1989 年
- 30) 蝦名賢造『新渡戸稲造』新評論, 1986 年